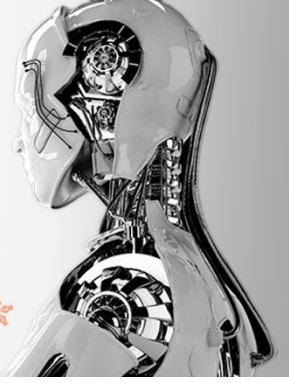


Robotics Report

新たな常識のはじまり

東京五輪が 日本のロボティクスを進化させる

nikko am
fund academy



開催まで1年を切った東京五輪。同大会では、多くのロボティクス技術が投入される予定です。そこで今回は、大会を支え盛り上げてくれるであろう技術に焦点を当てて、ご紹介します。

■ AIが競技を採点、観客の満足度を高める東京五輪

近年、体操競技では難しい技や高速な技を取り入れる選手が増え、審判員の目視による判定が難しくなっています。そこで導入されたのが、富士通の「採点支援システム」です。

同システムは、AI（人工知能）や3Dレーザーセンサーを活用して競技者の動作を計測し、数値データとして分析することで正確な技の判定を支援します。同システムの活用で、審判員の負担軽減に加え、観客にも技の難易度を「可視化」することで分かりやすくなり、エンターテインメント性の向上が期待されます。東京五輪では、男子のあん馬、つり輪、跳馬、女子の跳馬、平均台の5種目で活用する予定です。

また、大会期間中は約1,000万人の来場が見込まれていることから、東京都内の“過密化”が懸念されています。そこで、政府や大会スポンサーを務めるNTT・東京メトロなどは、混雑緩和のためにAIシステムを活用し、列車増発や迂回ルート案内などを行なう計画です。



※写真はイメージです

■ ロボットを社会実装する契機

今年3月、東京2020組織委員会は「東京2020ロボットプロジェクト」を発表しました。目的は、東京五輪を契機にロボットの社会実装を推進し、日本と世界にポジティブな未来を提示することです。

具体的には、遠隔地にいる人がその場所にいるような感覚で会話や握手などが体験できるヒューマノイドロボット、360度カメラとディスプレイを搭載した遠隔地間コミュニケーションサポートロボット、運営作業スタッフの負担を軽減するパワーアシストスーツ、陸上競技場で投てき物を回収・運搬するフィールド競技サポートロボットなど、さまざまなタイプのロボットが導入される予定です。



※写真はイメージです

警備においても、ロボットが導入される予定です。すでに、成田空港で導入され、駅構内でも実証実験が行なわれています。日本の警備ロボット開発関係者は、「1964年の東京五輪は警備業界の発展において大きなターニングポイントとなった。今回はロボットが警備をするという新しい警備の在り方をアピールする絶好の機会。また、大会を通じてロボットがさらに学習を深めることができるので、技術の発展をもたらす契機にもなるだろう」と語っています。

このように、東京五輪は日本のロボティクス技術を誇示する“ショーケース”になるだけでなく、その技術をさらに先に進める“実験場”になることでしょう。東京五輪は、日本のロボティクス産業の発展にとって、大きな可能性を秘めているのです。

上記銘柄について、売買を推奨するものでも、将来の価格の上昇または下落を示唆するものでもありません。また、当社ファンドにおける保有、非保有、および将来の個別銘柄の組み入れまたは売却を示唆するものでもありません。

(当レポートは、株式会社ロボティアの情報をもとに日興アセットマネジメントが作成しています。)

■当資料は、日興アセットマネジメントがロボティクスに関する情報についてお伝えすることを目的として作成したものであり、特定ファンドの勧誘資料ではありません。また、弊社ファンドの運用に何等影響を与えるものではありません。なお、掲載されている見解は当資料作成時点のものであり、将来の市場環境の変動等を保証するものではありません。■投資信託は、値動きのある資産(外貨建資産には為替変動リスクもあります。)を投資対象としているため、基準価額は変動します。したがって、元金を割込むことがあります。投資信託の申込み・保有・換金時には、費用をご負担いただく場合があります。詳しくは、投資信託説明書(交付目論見書)をご覧ください。